

## ナダレ埋没者を初めて救出 2/11 の雨の日だった

OWCC 中川和道 20200115

また救助の体験記だ。1992 年だかの 2 月 11 日のことだ。八ヶ岳阿弥陀岳中岳沢で雪崩にやられ埋没した方を掘り出したものの目の前でお亡くなりになり、大泣きした。その経験を書こう。

OWCC の A 木と中川は、2/10 に赤岳主稜だかを登って行者小屋テント場に下山した。後発の A 下が 2/10 にテントをもって入山してくれるはずだった。ところが大きな 2 つ玉低気圧がやってきて 2/10 夜からは異常な高温気象で雨確実予報だった。A 下は何と、「入山を止めました」とかで、テントが届かない。何というひどい話だ?! 非常用ツェルトだと大降りの雨にとても耐えられない。2 人は行者小屋に逃げ込んだ。雨の音を聞きながら 2 人の心配は募るばかり。1982 年 3 月 21 日の八ヶ岳大雨の状況と酷似していたからだ。その日、神戸みなと労山の仲間がここ阿弥陀岳中岳沢で雪崩にやられ 11 人が死んだ。中川はその日、星稜登高会の M 田さんたちと白馬岳主稜を登っていたのだが、雨を含んだみぞれ雪が旧雪の上に不安定に乗っかり、稜の左に足を踏み込むと左にザザザッとナダレが落ち、右に踏み込むと右にナダレが落ちる。「全国どこかで大きなナダレ事故が起きている気がする」と話し合いつつ完登し、東京（当時は東京在住）に帰って、神戸みなと労山の悲劇を聞いた。「折りたたみ傘を背に、彼女が「ナダレだ!」とこっちを向いた後ろから、雪の壁が襲いかかって来た」と労山機関誌『山と仲間』1982 年 5 月号は書いた。

1992 年だかの 2 月 11 日昼前、血相を変えた 1 人の男が行者小屋に駆け込んできた。「〇ヨドガワ〇〇会? です。中岳沢を下降中、連れ 1 名が雪崩に埋められた。救助して下さい!」小屋の方々が救助隊を募る。中川・A 木も、「ヨドガワ」と聞いて一気に立ち上がった。後から聞くと「江戸川〇〇山の会」とかで東京の会だったのを 2 人は聞き間違え、「すわ、おおさか」と、血気にはやって立ち上がったのである。

状況を聞く。プローブ（当時はゾンデと呼んでいた）が現場にはないという。小屋にもない。中川 A 木は、建築用の鉄筋を、何と、ひとり 5 本ずつ担いで強力（ごうりき）のような様相で小屋を出た。さすがに重すぎて沢途中で 3 本ずつに減らし、あえぎながら現場に到着。現場はお決まりの滝の所（中川は俗に「のど」と呼んでいる）だ。すでに 5、6 人の方々が到着している。「OWCC の A 木と中川です。この場を仕切る責任者は誰ですか?」「まだいません」「では中川が仕切ります。見張り 1 名とゾンデ捜索 6 名? でいきます。ゾンデの練習をします（練習実施）。では一列に並んで下さい。はい、スカッフ、コール、ゾンデ挿入、確認。いなければ、全員、一步前に。繰り返します、はい、スカッフ、・・・」10 分ほどたったか? 「見つけた」の大声が。

「傷つけずに掘り出せ。そこからは手で・・・」みんな必死である。男性 1 名が出てきた。呼吸はしていないが確かに暖かい。A 木中川で心臓マッサージとマウスツーマウスの人工呼吸を行う。他のみんなも交代してくれた。だが、蘇生しない。うーっ、時間が過ぎていく。中川はえいっと、口を吸いこんでみた。ゲロだ、のどに詰まっている。だんだん冷たくなっていく。みんなへへとだ。A 木中川は泣いた。大泣きしながら力なく胸を押した・・・思い出すと今も涙がでる。

今の時点で検討し直してみた。(1)埋没後 45 分以上経っていたようだ。これでは蘇生は難しい。(2)スコップ・プローブ・ビーコンが当時は普及していなかった。誰も持っていなかった。(3)ホッカイ口をまず健常者が発熱させてから寝袋に入れ、暖めたあとに埋没者を収納するべきだが、そういう手順が確立していなかった。

その夜は、行者小屋のそばにご遺体を安置し、翌日、おろした。後日、同行者の方が職場の大学に来られ、全国を回ってお礼をしていますと泣いて行かれた。自分の無力さを知らされた、つらい体験だった。

以来、中川は講習でその場所「のど」で埋没体験をやらせてもらっている。

八ヶ岳ジョウゴ沢で男性を救助して救助隊長をしたのだが、法律的に無効ですと言われてしまった。皆さんの参考になれば幸いだ。

よく晴れていた。赤岳鉱泉山荘がまだ古い建物だったころ、小同心を登ろうと星稜登高会のT橋一光さんと朝、鉱泉に立ち寄り、鳥のモモ焼を食べ馬力をつけて心を奮い立たせていた。その時だ。男が青い顔で走り込んで来て小屋のご主人に必死の形相で何か訴えている。あかん、事故だ。ご主人が舐めるような視線で登山客を眺める。救助隊を探しているのだ。中川とT橋は壁を向き「私は他人」を決め込んだが、やっぱり、だめだった。大きな声で「そこのお2人!」、あーあ。

2人は運命に翻弄されつつジョウゴ沢を登った。聞けば、早朝から単独で1名が30m大滝にとりついたが、シブのため抜け口でアイスパイルがはずれて転落、滝底で足首を骨折。動けなくなり次の人を待っていたら2人目も単独登攀者。救助を依頼された彼が山荘にやってきて救助を依頼。プロガイドのS野さん一行がスノーボートを担ぎ上げたものの「できる人間をあと2人以上連れて来い」となったらしい。中川たちが到着したときスノーボートは大滝の下の20mの垂直氷瀑の上で待っていた。S野さんに総指令をお願いして中川は大きな流木にロックハーケンを打ち、ファモウという愛用の確保器でボートを垂直に吊るしT橋とあと1人が下から逆V字に振れ止めを施しつつゆっくり氷瀑を下ろした。次に5m、15mなどの滝を順調に下ろし、やっと一般登山道に出た。

おや、硫黄岳の登山道からスノーボートを囲んで大勢の人々が下りてくる。見れば、東京都西部連盟で名を馳せている（今は労山カレンダーの大写真家だ）O氏がリーダーではないか。「何だよ、中川さんも救助訓練かい?」「え、冗談じゃないっすよ。こっちは本物ですよ」「じゃ、とりあえずうちのけが人の役には歩いてもらって、中川組に合流するよ」「すみません」、という訳で赤岳鉱泉着。ここでS野さんから重大なご発言が。「あなた方の救助はなかなか良い。ここから登山口までおろすさいの注意事項を言ってみなさい」「はあ、丸木橋からスノーボートが落ちこないように中央部を掘り下げる先遣隊を送ります。あと、小便をしてもらってからスノーボートにしばりつけます」とか何とか、なんでこんなこと口頭試問されるねん?と思いつつ答えた。するとS野さんは「私は客2人を連れて小同心正面クラックを登りに来たのだがこの時間からなら可能だ。ここから登山口までの救助隊、あなたに指揮を譲りたい。引き受けてくれませんか?」「はあ、お客はいくら払ったんですか?」「そっと言うけど、小屋代交通費別でひとり6万円だ。だから何とか登らせてやりたい」「了解です。S野さんご尊敬申し上げます。やらさせていただきます」。

S野さんが去ったあと、中川とOさんはどっと不安に襲われた。何しろアマチュアだ。どこにぬかりがあるか分からない。中川は、丸イスに腰かけてパケツに小便をしてもらっている男性に「アマチュアのみなさんに救助を依頼する以上、何があってもいっさいの責任は問いません」という念書を書いていただいた。あとで聞けば、これが無効だった。

西部連盟と星稜登高会の合同救助隊は、とにかく彼を無事登山口に下ろすことに成功した。警察の方が車で上がって来ておられ、「痛み止めは、何を、何時に、何錠飲ませたか」とまず聞く。さすがなものだ。ポンタールを結構飲ませたのでその旨書いてお渡しした。駆け出しクライマーだった中川に丁寧なお礼を述べて下さったので感激した。

その後、東京に帰ったら、事故の方からていねいなお礼状と、何と10万円近いお礼金が届いた。びっくりした中川はその日のうちに「明日は我が身かも知れない。こんな大金を皆さん全員ににお

払いたのでは、山をおやめになるかもしれないと心配。お金は返すから、山はやめないで下さい。山で、また、お会いしましょう」と送り返した。周囲からは「青いなあ」と揶揄された。

「いっさいの責任問いません」は無効だとお聞きしたのは、2012年10月の溝手康史さん講演会「登山と法律」の場であった。座談会で安藤誠一郎さんにも切々と言われた。アマチュアゆえの怖さから過剰防衛をしてしまった。前も後ろも右も左も見ない、体当たりの、すごい体験だった。